“博学連携”について考える、体験する！　～「教員のための博物館の日inひとはく」

当館は今年10月に開館20周年を迎えますが、これを機に当館が取り組んできた“博学連携”について考えるイベント「教員のための博物館の日inひとはく」（フォーラム、サイエンスワークショップ）を、かねてより博物館と学校の先生方の連携を深める事業を実施している国立科学博物館の協力を得て8月21日（火）当館で開催しました。

午前中のフォーラムでは、“博学連携”の取り組み事例報告として、国立科学博物館小川義和氏、日本科学未来館池辺靖氏、元兵庫県立三田祥雲館高等学校藤井俊氏の発表に続き、当館岩槻邦男館長、コーディネーターとして神戸大学大学院の伊藤真之氏も加わり“博学連携”の課題や展望についてパネルディスカッションを行いました。

午後のサイエンスワークショップには博物館、研究所、企業、NPO等学校教育支援に興味や実績のある18団体の出展があり、100名近くの学校の先生方や、このテーマに興味のある約900名の参加を得て盛会となりました。以前当館で実施されていた「サイエンスショー」を彷彿とさせる賑わいを見せました。

1日限りのイベントでしたが、“博学連携”についての重要性や課題の一端が明らかになるとともに、博物館や企業が持っているコンテンツが、如何に学校教育に役立つかを、参加の学校の先生方やNPO等、市民のみなさまに示すことができたと考えております。また、参加いただいた博物館等スタッフの方々の“連携”を作り、深めることの一助になったのではないかと思います。この内容は今後ホームページ等で全国に情報発信していく予定です。　西岡敬三（生涯学習課）

出展団体一覧（順不同）

国立科学博物館「国立科学博物館を授業で活用しよう！」、日本科学未来館「Geo-Scopeを用いた学校向けプログラムの紹介」、大阪自然史博物館なにわホネホネ団「消しゴムでホネハンコを作ろう！」、伊丹市昆虫館「ふれあい体験むしさんこんにちは」、きしわだ自然資料館「チリメンモンスターで海の生物多様性をさぐる」、三田市立有馬富士自然学習センター「理科教材のつくりかた～バッタのぬいぐるみ編～」、NPO法人人と自然の会「古代体験『彩色勾玉づくり』」、三田市科学教育研究会「簡単でよく回るモーター模型づくりとその回転原理の正しい理解」、NPO法人体験型科学教育研究所「ＧＥＭＳプログラム体験～身の回りのもので科学的思考力、応用力を～」、宇宙箱舟製作委員会（京大宇宙総合研究ユニット内）「宇宙箱舟ワークショップ：生物や文化の多様性を考える教材」、兵庫県立淡路景観園芸学校「花壇を彩る毒のある花と食べられる花」、兵庫県森林動物研究センター「野生動物の保全管理の最前線」、兵庫県立西はりま天文台「無料の天文ソフトを使ってみよう」、兵庫県立コウノトリの郷公園「コウノトリとジオパーク」、共立理化学研究所「パックテストで、簡単に！全く同じに見える水の違いを調べてみよう！」、ＪＸ日鉱日石エネルギー「ＥＮＥＯＳ燃料電池に触れる体験教室」、兵庫県立人と自然の博物館研究員「三角のちから」「展示で学ぶひょうごの里山」「ミツバチの巣箱の中はどうなっているのか」、「化石のレプリカ型づくり」、兵庫県立人と自然の博物館フロアスタッフ「川でさかなつり」

フォーラムのようす

フォーラムで“ゆめはく”を語る

ひとはくではこれまで、キャラバン事業で県内各地へ出かけ、各地の人たちとの相互交流を進めてきました。20周年を機に、ひとはくの今後のアウトリーチ事業や地域連携をより一層深めていくために、移動博物館車「ゆめはく」を開発しました。ゆめはくは、標本などの展示物を積載して各地へ直接訪れ、現地のみなさんに楽しんでいただこうというもので、いろいろな使い方が期待できます。

そこで今回、神戸市にある兵庫県公館で、その活用方法をテーマとしたフォーラム「ひとはくが公館にやってきた！～地域とひとはく～」を開催し、多くの方々とアイデアを話し合うことにしました。フォーラムには県内外から115人の参加があり、基調講演として、福島県の環境水族館アクアマリンふくしまから、移動水族館車「アクアラバン」が福島県内外で行っている活動の紹介や、佐用マリア幼稚園で行われたキャラバンでの園児たちのようすが紹介されました。地域連携におけるゆめはくの使い方について活発な議論が繰り広げられ、「大人は子どもたちに教えるのでなく、大人自身が同時体験をして楽しむことが大切だ」、「県内といわず日本中に出かけ、ゆめを運ぶ、ゆめをつなぐ、ゆめはくで地域に元気を！」という意見が出されました。

公館の外の庭では、ひとはくキャラバンのプログラムが催され、約1000人が参加されました。親子連れはもちろん、むしろ大人の方々から「博物館ってこんなにおもしろいことをやっているんだね。三田はちょっと遠いので、近くに来てくれたら楽しいのに。」というご意見をたくさんもらいました。

最後は岩槻邦男館長から、「ひとはくキャラバンでは、私たちが教え、みなさんが勉強するのではなく、みなさんが自ら楽しく学ぶのを私たちが支援する。そういうふうにひとはくを使ってほしい。」という呼びかけで締めくくられました。「ゆめはく」を活用した、ひとはくキャラバンの今後を楽しみにしてください。

高橋 晃（事業推進部）

キッズひとはく大使による受付

フォーラムのパネルディスカッション

フォーラム会場のようす

公館の外の庭で行ったキャラバンのようす

ひとはくKidsキャラバンin東北☆レポート

Kids キッズ ひとはく

写真1　貞山小学校での授業のようす

写真2　化石の展示（貞山小学校）

写真3　福島市こむこむ館のようす

キッズひとはく推進室では、6月8～10日と7月25～27日の日程で、ひとはくの東日本大震災の復興支援活動である「ひとはくKidsキャラバンin東北」を実施しました。6月8日は、宮城県石巻市立貞山小学校で佐用町西はりま天文台公園の時政氏とひとはくの古谷・布施両主任研究員が出前授業と展示を行いました（写真1・2）。分光器での光の観察やタネの模型飛ばし、化石に触れる体験にあちこちで歓声があがっていました。続く9日、10日は、全国から博物館や科学館、美術館などが被災地の子どもたちのために集まった「こども☆ひかりフェスティバル」に参加しました。9日の仙台市科学館には約3500名、10日の福島市子どもの夢を育む施設 こむこむ館には約2900名という大変多くの方々が来場してくださいました（写真3）。

7月25日からのキャラバンでは昨年訪れた施設への、念願の再訪がかないました。25日は仙台市六郷児童館、26日には七郷児童館を約1年ぶりに訪問しました。前回の訪問を覚えていてくれた子どもたちもいて嬉しかったです。両日とも仙台市太白山自然観察の森の方にご協力いただき、七郷児童館では仙台市科学館と仙台市天文台の皆さんとも一緒に活動しました（写真4・5）。翌27日は福島県会津美里町に立地する楢葉町の仮設住宅で、福島県立博物館と環境水族館アクアマリンふくしま、会津高校生物部OB会の皆さんと共に実施しました(写真6・7・8)。楢葉町は福島第一原発事故の影響で、震災から１年以上経った今でも町のほとんどの地域に避難指示が出されています（2012年8月17日現在）。訪問前は、自分の町から離れ、慣れない環境で生活している子どもたちの様子が気になっていました。実際に集まってくれた子どもたちは、デジタル紙芝居や化石の話、レプリカづくりなどの用意したプログラムを楽しんでくれたようすで、キラキラした表情を見せてくれました。もちろん子どもたちの受けたショックは、表面から読み取れない部分もあり、楽観視はできません。でもキャラバンでの体験で感じた驚きやわくわく感、「できた！」といった達成感が、子どもたちが明日に向かう際の自信や力になればと願っています。

高瀬優子（キッズひとはく推進室）

写真4　六郷児童館の参加者のみなさん

写真5　拡大模型の展示（六郷児童館）

写真6　宮里ふれあい館（会津美里町）

写真7　かやあそび（会津美里町）

写真8　地域のスタッフのみなさんと（会津美里町）

編　集：広報・出版支援担当/橋本佳明・加藤茂弘・藤井俊夫　　生涯学習課/西岡敬三・八尾滋樹　　小林美樹（編集長）
デザイン：大本紗緒理・美濃杏奈・松田沙耶香
印　刷：ウニスガ印刷株式会社

※本紙の無断転用・転載はご遠慮ください。